

## ウィリアム・ジェイムズにおける物心二元論の打破と純粋経験の分化

山根秀介（舞鶴工業高等専門学校）

### はじめに

ウィリアム・ジェイムズの根本的経験論 (radical empiricism) の主要な狙いは、これまで別々の独立した実体あるいは領域として考えられてきた心の世界と物の世界、あるいは主観と客観といった伝統的な図式を根幹から突き崩すことにあった<sup>①</sup>。実際『『意識』は存在するのか』でのジェイムズの出発点は、二元的な認識論における「意識」概念に対する批判である。哲学では伝統的に、一方に「思考」、「精神」、「魂」を、他方に「物」、「物質」、「身体」を置いて、この二種類の項を異なる次元に属するものと想定してきた。そしてそれらの対比関係がさまざまな形で語られることにより、多種多様な二元論的哲学が展開された。とりわけカントが「超越論的自我」の概念を導入して以来、そして新カント派以降、一方の極である「意識」が意義を失っていく。そこで「精神の原理はすっかり幽霊のような状態にまでやせ細り」、それ自体については何も語ることでできないような単なる「純粋な透明性の状態」(DCE/3) になっているというのである。意識はもろもろの第一原理の中に場所をもたない非実体なのであって、いっそ私たちはこれを破棄すべきであるとジェイムズは宣言し、そうして「純粋経験」が持ち出されることになる。

本稿では、第一章でジェイムズのこのような二元論の打破がどのようにして成されたかを、「純粋経験」という概念から明らかにする。続く第二章で、主観的な世界、客観的な世界と言われるものが、いかなる機構によって生じてくるのかについて、「身体」と「行為」を鍵概念として解明することを試みることにしたい。

## 1 「純粋経験」による物心二元論の乗り越え

### 1. 1 潜在的なものとしての純粋経験

まず、「純粋経験 (pure experience)」とはいかなるものであるかについてここで確認しておきたい。それは端的に、「世界のうちの原初的な素材ないし材料、すな

わちあらゆるものを構成する素材」(DCE/4)と定義される。純粋経験は、それ自体としては主観でも客観でもなく、また「これこれのもの」としてはっきりと明確に捉えることのできないものである。

現在の瞬間的な領野は、どんな時でも私が「純粋」経験と呼ぶものである。それは今はまだ、可能的、潜在的にのみ、対象あるいは主観である。その現在の間中、それは素朴な無制限の現実性ないし現実存在、単純なあれである。それはこの素朴な直接性において当然妥当なものである。(DCE/13)

現在という瞬間的な領野はいつも、「純粋な」状態における経験、無修飾で無限定な現実性、単純なあれであって、まだ事物と思考とに分化しておらず、それが客観的な事実として、あるいは事実に関する誰かの意見として分類されるのは、ただ潜在的にのみである。(WPE/36-37)

純粋経験は、その都度その都度の瞬間においては認識論的属性を持たないばかりか、いまだ「あれ」としてしか指示することのできない、混沌状態にある諸々の質の入り乱れ、相互浸透である。それはいまだ現実的な「何」ものでもない。むしろ現実性の背後でうごめく混沌、そこから現実的なものが発生してくる源泉である。ジェイムズの言葉に反して、そしてドゥルーズ<sup>2)</sup>、ラプジャード<sup>3)</sup>とともに、この純粋経験を「潜在性」として捉えることができる。もとは非常に渾然としており、「相違点も同一点も捉えられることのない」流れであった純粋経験は、生まれ出た次の瞬間には「強調点で満たされていき、このようにして強調され目立ってきた諸部分が同一化され、固定され、抽象化される」(TR/46)。判然としない不明瞭なざわめき、無秩序の流動である純粋経験が、次第に主客を備えた私たちの人間的な経験世界へと分化し、現実性を帯びていく。純粋経験が「あらゆるものを構成する素材」と言われるのはこのような意味においてである。

## 1. 2 機能としての意識

次に、このような純粋経験から認識関係が生じてくると言われるのはどのような

意味だろうか。ジェイムズは認識する主観と認識される対象としての客観を私たちが現実に措定しているという事実を軽視しない。あらゆるものは確かに主客以前の純粹経験によって構成されているというのがジェイムズの動かぬ立場であるが、彼が焦点を当てるのは、そのような主客関係が現実にかんじて生じてくるのかという問いである。

「認識するものと認識されるものとは本来一つの同じ純粹経験である」という主張に対してなされるであろうとジェイムズが想定する反論の要諦は、「同じものが主観世界と客観世界とで二度数えられることは不合理である」というものである。それへの再反論としてジェイムズは、一つの純粹経験が複数の「文脈」の交差点にあるとき、それは一つのものでありながら複数回数えられることができると言う。すなわち、「経験の未分割の所与の部分が、複数の連合の一つの文脈においては、認識者の役割、精神の状態、「意識」という役割を演じ、別の文脈のもとでは、同じ未分割の一片として、認識される事物、客観的な「内容」の役割を演じる」(DCE/7)のである。

前節で示したように、純粹経験の重要な特徴は、それが主観と客観とに分かれる以前の中性的なあれとして現前するという点にある。それはそのものとしては精神的なものでも物質的なものでもなく、また主観的なものでもなければ対象的なものでもない。そうではなくて、そこから認識関係における諸属性が派生してくるところのものである。「客観的でも主観的でもないという意味での〈中性的〉多性、もろもろの系列へと集まり、交差し、重なり合う無限の諸関係」<sup>(4)</sup>である。ある同一の純粹経験が、一方では、認識者、精神の状態、「意識」といった役割を演じ、他方では被認識者、客観的な「内容」といった役割を演じることになる。

ジェイムズによれば、これまでの哲学が物の世界と思考の世界という二つの次元の異なる世界を設定することによって生じてきた困難はこれで解決される。同じ一つの部屋が物理的に存在すると同時に私の表象にも現れているとき、純粹経験としての〈一つの部屋〉(実際にはそのように名付けることも未だできないのだが)が、ある文脈では客観的存在として、別の文脈では私の主観的な経験としての地位を獲得するにすぎない。主観性とか客観性とか言われるものはあくまで「機能的属性」(DCE/13)でしかなく、実体的な意味を持ちはしない<sup>(5)</sup>。ジェイムズはこうして、いわゆる「意識」を自身の哲学から追放したのである。<sup>(6)</sup>

## 2 「純粋経験」の分化

本章では、前章で説明したような認識関係が継続・連続して、そこから主観世界と客観世界とが生じるのはどのようにしてかということの問題とする。そもそも主観という「文脈」と客観という「文脈」とは何を意味しているのか、またそれらはいかにして形成されるのか。まずはこの「文脈」を「過程」と言い換えている以下の引用を見てみよう。

それら二つの過程の内の一つは読者の個人的な一代記であり、もう一方の過程とはその部屋が属する家の歴史である。現前、経験、要するにあれ（というのも、それが何であるかを決定するまでは、単なるあれでしかないはずだから）が、感覚、感情、決心、運動、分類、予期等々から成る一繋がり最終項として現在において終結し、同様の一連の「内的」作業の始発項として未来へと延びている。他方で、まさしく同じあれが、建設工事、壁紙張り、家具設置、暖房設置等々から成る数多くのこれまでの物理的作業の到達点であり、物理的な部屋の運命を辿る際に関わることになる数多くの未来の作業の出発点である。  
(DCE/8-9)

ここでは、純粋経験としての<一つの部屋>が、それを経験する主体の内部の一要素であり同時に物理的世界の一部であるといったように二度数えられるのは、この純粋経験が、その主体の個人的歴史という時間的流れと、その部屋を含む家の歴史という時間的流れとの交差点に位置しているからであり、これら二つの流れはその交差点で一旦交わった後にそれぞれさらに未来へと向かって延びていく、ということが言われている。現在に属するこの純粋経験において、個人の人生と部屋の歴史という二つの時間の流れが交差している。

しかしこう考えても問題は解消されない。あらゆるものの素材である純粋経験は瞬間的なものであるとされていたのに、どうしてそこから一定の持続、時間的な幅をもった主観世界や客観性が生じるのか。以下では、それ自体では主観でも客観でもない瞬間的な純粋経験が、「秩序だった内的世界と外的世界とへ次第に分化していく」(DCE/18) 様を、またそのような分化を可能にしている「身体」の機能を考

察する。

## 2. 1 主観的世界の生成

ある純粋経験が主客に分化する際には、それが二つの異なる文脈に置かれるということを上で見たが、しかしいかなるきっかけによってそれが純粋なものでなくなり、主観という文脈に置かれるようになるのか。素朴な直接性にある純粋経験に対して「私たちは働きかける。そうして回顧においてそれを精神の状態と志向される実在へと二重化する」(DCE/13)。ジェイムズはその契機を「私有化(appropriation)」(HTM/64)と呼ぶ。彼によれば、私たちは無属性の純粋経験を、後から「私のもの」として捉え直して自分自身の流れの内に組み入れることで、それを私の主観的経験であるとす。それが「意識的」生と言われるのは、私がそれを主観的なものとするとき、まさにそのことによって認識＝意識が成立するからである。だからこの「私有化」と意識の現出とは同じ事態を指す。あらかじめ存在する固定的な意識によって経験が可能となるという超越論的な図式があるのではなく、次々に過ぎ去りゆく現在の純粋経験に後から「私有化」がなされるごとに、私たちの意識、連続した自己が更新されていく。

このような考えはすでに『心理学原理』に現れている。そこで強調されるのは、流れゆく経験のなかから一定のものを自己として採り入れ「私有化」するとき、「温かみ」、「親しみ」(PP/314) という基準が採用されているということである。

認知する意識の各々の脈動、各々の思考は消え去り、他がそれにとって代わる。この取って代わったものは、それが認識する諸事物のなかから自らに先行するものを認識し、すでに記述したような仕方ですべてを「温かい」ものとみなし、またそれを迎え入れて言う。「汝は私のものである、私と同じ自己の一部だ」。  
[中略] このような仕組みによって、生まれつつある思考が消えつつある思考を直接に取り上げて「採り入れる」のであり、このような仕組みこそ自己を構成する古い要素のほとんどを私有化する根拠なのである。(PP/322)

私たちは過去のさまざまな経験を振り返り、それらが「温かみ」と「親しみ」をもたらすものであれば私たちの自己の一部としてその流れのなかに組み入れて位

置付け、そうでないものは非自己として放棄する。このような作業が時々刻々と行われることで私たちの意識の同一性・連続性が保持される。次々と現れ出る経験（『心理学原理』では「思考」と表現される）はその時々で「現在にしっかりと打ち込まれた〔中略〕鉤」（PP/323）として働き、ここに自己に属する過去が鎖のように引っ掛けられていく。

しかしそれでも問題は残る。なぜなら「私有化」の基準が「温かみ」、「親しみ」だとしても、それではいかなる経験が温かく親しみのあるものとして迎え入れられるのかという、新たな基準が求められるからだ。その解決は本章第三節に先送りにして、次は客観世界の形成に話を移す。

## 2. 2 客観的世界の生成

主観的な世界と対をなす客観的、物理的世界がいかにして成立するのかということに関して、ジェイムズは前者の生成ほど多くを語っておらず、手がかりが少ない。まずは意識の世界と物理世界との差異を述べた以下の引用から検討する。

広がりをもったあらゆる対象についての十全な心的映像は、その対象自体が備えた広がりをすべてもっていなければならない。主観的広がりとは客観的広がりとの差異は、ただ文脈に対する関係の差異にすぎない。さまざまな広がりとは、心の中では必然的に強固な秩序を相互に保っていないのに対し、物理的な世界ではそれらは互いにしっかりと境界確定しており、ひとつに寄せ集められると巨大な包括的な単位を形成する。私たちはそのような単位が存在することを信じて、それを実在的な空間と呼ぶのである。（DCE/16）

ここは、思惟には広がりを認めないデカルト的な哲学をジェイムズが批判している箇所である。ジェイムズによれば延長物と思惟はどちらも広がりを持ち、前者は厳格で揺るぎない自然法則によって統御される物理的世界として想定される領域を、後者は個々人の見方や想像の働き、気分等といった「主観的」な要素によって変動すると想定される領域を形成する。ここでは特に、前者によって可能となる一つの「巨大で包括的な単位」こそ、あらゆる存在者がそこで存在し行為する場所として措定されるところの「空間」であるという指摘が重要である。私たちが実在的

なものとし、互いに共有していると考えている空間は、上のような想定・措定に由来する。主観と客観はもともと数的に一つの純粹経験であるとするジェイムズの観点からすれば、「客観的な物理的世界」と言ってもそれは語の通常の意味で「客観的」ではない。もちろん科学や日常生活でこの「客観世界」が十分に機能していることを考慮すると、ことさらにその仮構性を強調する必要はないのだが、客観世界だけが実在であって心の世界はそれによって触発されて発生した影に過ぎないということにもならない。

ではこのような客観世界がいかんにして形成されるのかという当初の問題に戻ろう。「～として想定される」ということは何を意味するのか。主観的世界の形成の場合、それは「私有化」に関わる。ここでそれに当たるのは、ジェイムズが「篩い分け (get sifted)」(DCE/17) と呼ぶ事態である。

「実在的な」対象には常にさまざまな結果が発生する。こうして実在的な経験は心的な経験から篩い分けられ、事物はそれについての私たちの思考（空想上のものであれ本当のものであれ）から篩い分けられ、混沌とした経験全体のうちの安定した部分として沈殿し物理的世界という名のもとで一つの塊となる。この私たちの知覚的経験はもともと強い経験なのであるから、それがこの物理的世界の核となる。(DCE/17)

この引用で言われる「実在的な」という形容詞は、「外界の」あるいは「客観的な」という一般的な意味で捉えてよい。混沌として秩序を持たない、主も客もない純粹経験の流れから、堅固な部分が寄り集まって物理的世界となる。これが「篩い分け」である。その核は私たちが直接に認識することによって得られる知覚的経験であり、これを中心としてそれよりは弱体な経験、つまり直接には認識していない概念的なだけの経験や想像による付加物が取り巻いていき、巨大な外界の空間が作り上げられる。私たちは各人で、また相互に篩い分けを行って客観世界に幾度も修正を施し、次第にその確実性を増大させる。

しかしここでもまた主観世界の形成における「私有化」に関して出くわした疑問と類似した疑問が生じてくる。経験全体の中から客観的なものとして篩い分けられるものは、何によって、いかなる基準によって、決められるか。「実在的な」対象にはいつでもさまざまな結果が発生する」とは何を意味しているのか。

## 2. 3 主客世界の生成における身体の役割

考えるべきは次の問いだ。何が私有化され何が篩い分けられるのかに関する基準はどのようなものか。現実的な私たちの世界が作り上げられるための最終的な審級はどこにあるのか。本稿ではそれを「身体」と「行為」に求める。私たちがカオスとしての純粹経験から具体的な主観世界及び客観世界を創造するにあたり、「身体」と「行為」こそが最も根源的な役割を担う。瞬間ごとに湧出し溢れ出る純粹経験は、この「身体」及びそれによる「行為」を通じて現実の主客世界へと分化発展していく、つまり「現働化」していく。以下でそのことについて詳しく論じる。まず世界経験における「身体」の重要性について述べられた次の引用を見ておこう。

経験される世界（「意識の領野」とも呼ばれる）はいつでも、この世界の中心、視界の中心、行動の中心、関心の中心としての私たちの身体とともに現れる。その身体があるのは「ここ」であり、身体が行為するのは「いま」であり、身体が触れるものは「これ」であって、他のすべての事物は「あそこ」にあり「そのとき」にあり「あれ」である。強調された位置を表すこれらの言葉は、身体の中にある行動と関心の焦点に関連した諸事物のシステム化を含意している。このシステム化は今では本能的なもの（そうでなかったことがあるだろうか）なのであるから、このような秩序づけられた形を除くと、発達したあるいは活動的な経験が私たちにとって存在することは決してない。(EA/86)

ジェイムズによれば、意識も外界も、可能な行動と利害関心にしがたって、「身体」を中心として「システム化」されるものである。私たちは「身体」を通して世界を秩序づけ整理する。世界は「身体」とともに、またその「身体」がないうる「行為」のいわば見取り図として構成される。これが本能的なものであるという言明には、そのようなシステム化が意識によって遂行されるわけではないということが含意されている。私たちが意識的に何かを認識したその後でこのようなシステム化が行われるのではなく、このシステム化が認識の成立条件なのである。もう少し具体的に見ていこう。まず主観世界が「身体」によって作られるのはどのようにしてか。

思考の私有化はそれ自身に対してというよりも、むしろその現在の対象の最も親しく感じられた部分すなわち身体と、思考の作用に伴う頭脳内の中枢性調整とに対するものである。こうしたものが私たちの人格的同一性の実在的な核であり、堅固な現在の事実として了解されたこれらの現実的な存在こそ、「私が存在することが確かであるのと同様に、こうした過去の事実も私自身の一部であった」と私たちに言わせるものである。これらは自己の表象された部分が同化され、融合され、結び合わされる核心である。そして思考が思考する働きにおいて全く自身を意識しないとしても、その現在の対象のこうした「温かい」部分は、人格的同一性の意識が依拠する確固たる基盤となるだろう。(PP/323)

私たちは、「身体」を触発してくるような経験、及びそれによって生じる「身体的な感じ」(PP/319) という基準によって自分に属するものを主観的状态となし、自己の列に加える。身体感覚と類似する、あるいはそれと連続するような経験がもろもろの純粋経験から選別され、それらが素材となって自己同一性が作り上げられる。したがってジェイムズにとって自己を構成する諸要素はいずれも、純粋に表象的、思考的、思弁的なものではなく、必ず「身体」と何らかの関連性をもつ。持続する自己はそれを暖かいもの、親しみのあるものとみなし自らの一部とする。私たちは「身体」を動かすことで行為し、またこの「身体」を通して受容する。この過程のただなかで、「身体」と不可分な形で自己の歴史が形作られていく。

ラブジャードがこのような事態を念頭において、主観は「身体的触発の解釈」<sup>⑦</sup>であり、「身体を通る諸関係の束から組織化された座標の、慣習による総体」<sup>⑧</sup>であると述べたのは全く適切である。しかし彼は客観の「解釈」に関しては言及していない。本稿では上述のように、純粋経験から物理的世界への分化においても、「身体」と「行為」という契機が根源的な働きをなすと考える。

たとえばこの「ペン」は最初の瞬間にはむき出しのあれ、所与、事実、現象、内容、その他中性的あるいは両義的な名前が好きに呼んでよいものである。[中略] 物理的なペンないしペンという誰かの知覚として分類されるためには、それは一つの機能をもたなければならず、そしてこのことはただより複雑化した

世界でのみ起こりうることである。このような世界でそれが安定した形をとり、インクを含み、紙にしるしをつけ、手の導くままに動く限り、それは物理的なペンである。これがペンにおいて「物理的」と言われることの意味なのである。

(HTM/61)

中性的なあれでしかない純粋経験が物理的なものとして現実世界のうちに配置されるためには、それが私たちの身体によって使用され、具体的に何らかの効果を及ぼすのでなければならぬ。私たちがペンを使って文章を書き、インクが紙に移って文字が現れ、またそれを他の人が読むことができるという効果が生じるまさにそのとき、ペンは客観的なものとして扱われ、これまで形成してきた巨大な物理的世界のなかに一要素として組み込まれることになる。このように、「身体」による実際の働きかけ、すなわち「行為」に対して効果を発揮することを網目とした篩い分けを通して、私たちは個々人の主観的要素には影響されえない堅固な外的世界を少しずつ組み上げていく。それはつねに形成途中のものであり、更新し変化する可能性に開かれている。私たちは何度も行為を重ねてその結果を確かめることで、客観的世界を確立していく。

ここではそれぞれ別々に説明された、身体を契機してなされる二つの作用、すなわち「私有化」と「篩い分け」は、実際には身体による「行為」によって遂行される同じ出来事の裏表である。認識の「主体」が確定されることと、認識の「客体」が確定されることは同じである。人間は現出し続ける「純粋経験」から、「身体」を介した行為によって、一方で身体的な感じを伴う経験の「私有化」を行って「私のもの」としての主観を、他方で実際の帰結をもたらす経験の「篩い分け」を行って「私でないもの」としての客観を、絶えず選り分けている。私たちは行為するたびに、「身体」を通して自己自身と外的世界とを刷新し、創造し直していく。潜在的なものとしての純粋経験から具体的な世界への「現働化のプロセス」は、いつでもこの「身体」と「行為」に準拠してなされる<sup>9)</sup>。

## おわりに

最後に「はじめに」で触れたジェイムズのカント（主義）批判に戻り、本稿で辿ったジェイムズの思索を改めて意義づけたい。ジェイムズは超越論的自我とそれに

よって構成される現象としての世界という二元論的図式を厳しく批判して、本来は一つの純粹経験が異なる文脈で二度数えられることによって認識主観と認識対象と呼ばれるものが生じてくるに過ぎないとした。カントにおいて世界を成り立たせているのは超越論的で本性上世界の「外」にある自我だが、ジェイムズは世界を成立させている根源を徹底的に内在化したのであり、純粹経験から現実的世界を構成する最も根本的な契機として「身体」を捉えたのである。ジェイムズがカントの「我考える (I think)」にかえて「我呼吸する (I breathe)」という謎めいた言い方をした (DCE/19) のは、「身体」が作動し行為がなされるそのたびごとに認識が成立し、主観世界と客観世界が更新されていくということを言い表すためであったと言える<sup>100</sup>。ジェイムズにとって一切の表象に伴わなければならないのは、動き、行為し、動悸し、呼吸するこの「身体」なのである。

尤もここで一つの重大な問題が発生する。本稿の議論にしたがえば、ジェイムズにおける「身体」は普通の意味での「経験」の可能性の条件であって、ゆえにそれはカントと同じく超越論的なものであるのではないか。もし「身体」を経験世界の外に置かず、あくまでその内部にとどめておくのなら、主観と客観を生じさせ、しかもそのいずれでもない「身体」とはいかなる存在なのか。そもそもそれを「存在」と呼ぶことはできるのか。このような疑問が生じてくるだろう。これに答えるのは容易ではない。ジェイムズのテキストに寄り添うだけでは解けない難問であろう。そこで最後に、次のような仮説を出して本稿を終えたい。主客が分化するその手前にあるが、それでも私たちの世界の「内側」にあるものとして「身体」を理解するために、それを「純粹経験」が生じてくる「場」、そして「純粹経験」がそこから主観と客観とに分化していく「場」として考えることはできないだろうか。つまりジェイムズにおいて、あらかじめ存在する「身体」に「純粹経験」が到来するというよりも、「純粹経験」が到来する「場」を「身体」として考えるのである。そもそも一般的に言って、身体は外から物理的なものとして見られ触れられるものであると同時に、内から主観的に把握されうるものでもある。このような二重性を備えたものを主客の経験の根源とするのは、議論としてありうる行き方であるように思われる。これはあくまでジェイムズのテキストから直接は導かれない仮説である。しかしジェイムズの主張と矛盾を起こさずに上のような問題を解決しようとするならば、こう考えるよりほかがないのではないだろうか。こうした雑駁な見通しの精緻化・洗練化については、別の機会を設けたい。

## 凡例

『心理学原理』(1890) =PP からの引用には Harvard University Press 版の全集 *The Works of William James* のうち *The Principles of Psychology; Vol.1* を用いる。

以下のジェイムズの論文からの引用・参照には *The Works of William James* のうち *Essays in Radical Empiricism* を用いる。

Does 'Consciousness' Exist? (1904) =DCE

A World of Pure Experience (1904) =WPE

The Experience of Activity (1904) =EA

How Two Minds Can Know One Thing (1905) =HTM

The Place of Affectional Facts in a World of Pure Experience (1905) =PAF

The Thing and Its Relations (1905) =TR

引用・参照は (著作・論文の略称/原著の頁数) といったように行う。

## 注

- (1) 「ジェイムズの全企ての本質は、認識論的二元論の手前に遡ること、諸関係が純粹な状態で、すなわちそれらが何らかのカテゴリーの対 (主観/客観、物質/精神、等々) へとまだ振り分けられる前のときに、与えられる場所へと遡ることである」(David Lapoujade, *William James: Empirisme et Pragmatisme, Empêcheurs de Penser en Rond*, 2007, p. 30)。
- (2) 「ひとつの生が収めるのは潜在的なものだけだ。ひとつの生は、潜在性、特異性、出来事からなる。潜在的と呼ばれるものは、現実性を欠いたなにかではない。そうではなく、それに固有の現実性を与える平面にそって、現働化のプロセスにはいっていくものだ」(宇野邦一監修『ドゥルーズ・コレクション I 哲学』河出文庫、二〇一五年、一六三頁)。ここでジェイムズの純粹経験はドゥルーズ『差異と反復』における差異的=微分的なもの、〈理念〉、潜在性といった諸概念、また「超越論的经验論」と接近する。「ひとつの超越論的場とはなにか。ひとつの客体に向かうことも、ひとつの主体に属することもないのだから、超越論的場は経験(経験的表象)とは区別される。こうして超越論的場は、非主体的意

識の流れ、非人称の前省察的意識、わたしを持たない意識の質的持続として提示される」(同書一五八頁)。

- (3)「したがって純粋経験の世界は、もろもろの潜在性が駆け巡る膨大な領野である」(David Lapoujade, *William James: Empirisme et Pragmatisme*, p. 41)。
- (4) David Lapoujade, «Le Flux Intensif de La Conscience Chez William James», dans *Philosophie, Tome 46*, Paris : Minuit, 1995, p. 75.
- (5)「ジェームズの見解では、主観／客観の区別が経験の内ですたす実際的な機能は、必ずしも形而上学的あるいは存在論的な根本要素あるいは実体の数を増やすわけではない。そうではなく、それはその多様な機能や使途——そのなかの一つがある特定のケースでは認識である——に応じて同じ純粋経験を分化させる手段を与える」(David C. Lamberth, *William James and the metaphysics of experience*, New York, Cambridge University Press, 1999, p. 36)。
- (6) ジェームズは他にも二つの種類の認識について述べているが、それらはいずれもここで説明した認識に基づいている。第二の認識は、ある関係によって結ばれた二つの項のうち一方が認識主体となり他方が認識客体となることで生じる。これは事物を概念的あるいは表象的に認識することに関わる。(DCE/4-5, WPE/29)。第三の認識は「代用」と言い換えられるものであり、何らかの観念が指し示す先の対象を実際に確認することなく、自分自身の経験から、あるいは他人の経験に対する信用から、その観念が真であることを確実なものとして処理し利用する際に起こる認識である。第二の認識も第三の認識も、第一の認識に基づいているということが重要であり、ゆえに第一の認識をモデルとしてジェームズの認識論一般を語る事が可能である。
- (7) David Lapoujade, *William James: Empirisme et Pragmatisme*, p. 50.
- (8) *Ibid.*, p. 57.
- (9) 本稿のように「身体」と「行為」が純粋経験から現実世界への分化を可能にすると解釈するジェームズ研究は、少なくとも管見の限りでは存在しない。スプリッグはジェームズの経験論において物理的なものがいかにして生じてくるかという問いに取り組んではいるが、そこで「身体」や「行為」といった契機は触れられていない(T. L. S. Sprigge, *James and Bradley: American Truth and British Reality*, Open Court Publishing Company, 1993, p. 137-143)。またすでに述べたように、ラブジャードも主観世界の構成において「身体」が重要な

役割を果たしていることを指摘しているが、そこには客観世界の構成についての記述はないし、何より「行為」という「身体」の能動的な役割が見過ごされている。プラグマティストであるジェイムズにとって、「身体」は受動的でしかない単なる感覚器官の集積ではありえない。「身体」とそれによる「システム化」は当然まずもって「行為」のために存在するものであると私は考えたいのである。「プラグマティズムという言葉は行為を意味する「プラグマ」というギリシア語に由来するということを、私たちは忘れるべきではない。

- (10)「私の身体が呼吸することは私が「思考すること」であり、私の身体の感覚的調整は私の「注意」であり、私の身体の運動感覚の変化は私の「努力」であり、私の身体の内臓の動揺は私の「情動」である (PAF/76)」。